

シンポジウム

＜難民＞から考える未来の homeland ～クルドと沖縄を結んで～

パネリスト : イルファン・アクタン

仲里 効

新城 郁夫

司会 : 呉 世宗

2022 年 8 月 11 日 (木)

琉球大学

主催：琉球大学人文社会学部 新城郁夫研究室、呉世宗研究室

科研費基盤研究 (A)「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる
人文学的、領域横断的研究」

Irfan Aktan | イルファン・アクタン |

トルコのクルド人ジャーナリスト。アンカラ大学コミュニケーション学部ジャーナリズム学科在学中にジャーナリストとして活動を始め、ニュースウィークトルコ版をはじめトルコ各誌に執筆。テーマはクルド難民、人種差別政策、報道の自由と表現の自由など。2022年のEurope Press Awardの調査記事部門賞にノミネートされた。イラク・イラン難民のドキュメンタリー『オメルよ、家に帰れ』『裏庭の人々』を制作。著書に、クルド問題に関する識者へのインタビュー集『毒と解毒剤：クルド問題』（トルコ語・2006年）など。



仲里 効 | なかざと・いさお |

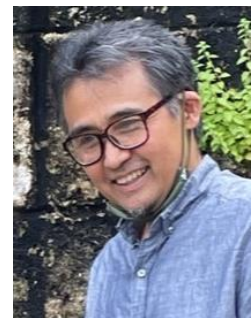
1947年沖縄県南大東島生まれ。季刊『EDGE』編集長。活字と映像から沖縄の境界性、エッジとしての沖縄を試みる。著書に『オキナワン・ビート』（ボーダーインク、1992年）、『ラウンド・ボーダー』（APO、1999年）、『沖縄の記憶／日本の記憶』（共著：未来社、2002年）ほか多数。



新城 郁夫 | しんじょう・いくお |

1967年、沖縄宮古島生まれ。琉球大学人文学部教授。専攻は、沖縄文学、日本近代文学、ポストコロニアル批評とジェンダー研究も行っている。

著書に、『沖縄文学という企て』（インパクト出版会、2003年）、『沖縄を聞く』（みすず書房、2010年）、『沖縄に連なる』（岩波書店、2018年）ほか。



呉 世宗 | オ・セジョン |

琉球大学人文社会学部教員。主著に『沖縄と朝鮮のはざままで——朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』（明石書店、2019年）、『リズムと抒情の詩学——金時鐘と「短歌的抒情の否定」』（生活書院、2010年）。共著に『動物のまなざしのもとで——種と文化の境界を問い直す』（勁草書房、2022年）、『残余の声を聴く——沖縄・韓国・パレスチナ』（明石書店、2021年）ほか。



岡 真理 | おか・まり |

元京都大学大学院人間環境学研究科教授。現在は、早稲田大学文学学術院教授。専攻は現代アラブ文学、パレスチナ問題。「思想としてのパレスチナ」をテーマに《パレスチナ問題》を現代世界に生きる人間の普遍的な思想課題として考究している。著書に『ガザに地下鉄が走る日』（みすず書房、2018年）、『アラブ、祈りとしての文学』（みすず書房、2008年）など。訳書に、ターハル・ベン＝ジェルーン『火によって』（以文社、2012年）ほか。



ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/祖国」の関係性について人文学的視座からグローバルに考究しています。2022年8月11日、プロジェクトの一環として、琉球大学を会場に、シンポジウム「＜難民＞から考える未来のhomeland～クルドと沖縄を結んで～」を二部構成で開催しました。第1部は、イルファン・アクタンさんによる基調講演のあと、仲里効さん、新城郁夫さんをパネリストに迎えパネルディスカッションをおこないました。第2部はセルダル・ジャーナンさんにクルド民謡の歌と演奏を実演していただき、棚原健太さん（琉球古典音楽、歌・三線）、町田倫士さん（琉球箏曲）、高井賢太郎さん（琉球舞踊）に琉球伝統音楽の歌と演奏、伝統舞踊を実演していただきました。ここに、第1部のイルファン・アクタンさんの基調講演とパネルディスカッションの内容を載録します。

＜難民＞から考える未来の homeland ～クルドと沖縄を結んで～

1. 主催者挨拶

岡 占領さえなければ、空はほんとうの空になり、海はほんとうの海になり、私たちはほんとうの私たちになる。そして、生きることはほんとうに生きることになる…

これは、イスラエル占領下のガザを舞台にした、パレスチナ人作家イブラーヒーム・ナスラッラーの長編小説『アーミナの婚礼』¹で、著者が主人公アーミナに語らせたことばです。このことばを真に理解できるのは、沖縄の人々であると思いました。なぜなら、この思いを日々、生きているのが、沖縄の人々であると思うからです。

今回、トルコからクルド人ジャーナリストのイルファン・アクタンさんと民族音楽研究者のセルダル・ジャーナンさんを日本に招聘し、4カ月近く、クルドの問題を集中的に考える機会を得たことで、クルドの人々もまた、この同じ思いを、この100年間ずっと、日々、生きているのだということを、あらためて思いました。

セルダルさんは、クルディスタンのハッカリ²出身です。インターネットで「ハッカリ」というキーワードで画像検索してください。冬、雪に覆われた峻厳な山脈、春、雪解け水を集める清冽な谷あいの川、色とりどりの花が咲き乱れる山麓、羊たちの群れ……。そうした写真が目に飛び込んできます。今日は第2部でセルダルさんがクルド民謡のいくつかを実演して紹介していただきますが、それらの歌は、クルディスタンのこのような風景のなかでクルド人として生きる人々が、その日常のなかで、自分たちの生の一部として、自らを形作る命の一部として、クルド語で歌っている、そのような歌です。

しかし、彼らが生きるクルディスタンの山も、川も、空も、草原も、花も、彼らのものであって、実は彼らのものではありません。占領は土地を奪うだけではありません。トルコによる同化政策のもとで、「クルド人など存在しない」とされ、クルド人は母語であるクルド語を話すことも、クルドの歌を歌うことも長らく禁じられてきました。自らがクルド人であるというアイデンティティを持つこと自体を禁じられたのです。

広島を訪れたセルダルさんは、広島の朝鮮学校を訪問しました。日本で、在日朝鮮人や朝鮮学校が置かれている差別的状況——たとえば高校無償化からの排除³はその

¹ ヨルダン在住のパレスチナ難民2世の作家、イブラーヒーム・ナスラッラーによる2005年の作品。第二次インテッファダのガザを舞台にし、日々愛する者を失う主人公アーミナが、愛する者たちの縁結びを願う物語。

² トルコ最南東部に位置する地域。クルディスタンの一部を構成し、イラクとイランに国境を接する。

³ 2014年4月より、公立高校授業料無償化が始まり、2020年4月からは、国立・私立・指定された各種学校に通う所得等の要件を満たす世帯の生徒に対し、高等学校等就学支援金の給付

一例です——については、ここであらためて申し上げるまでもないと思います。朝鮮学校、そこは、朝鮮に民族的ルーツを持つ子らが、この日本という国において、朝鮮人として自信をもって生きるためのアイデンティティを育むホームでした。子供たちが屈託なく母語を話し、民族の伝統楽器を奏で、民族の伝統舞踊を舞い、民族の言葉で歌を歌うその姿は、セルダルさんにとっては、クルド人が自分たちの明日の姿として夢見るものでした。

英語の‘Homeland’は、もともと「ホーム」の「土地」、すなわち郷里（ふるさと）を意味する言葉ですが、近代国民国家の成立とともに、国民国家としての「祖国」をも意味するようになりました。日本という多分にエスニックなネイション・ステイトにおいて、エスニック日本人にとって「祖国」というホームランドは、生まれ育った郷里としてのホームランドの拡大した同心円としてあります。しかし、自分や親が生まれ育って生の歴史を紡いできた郷里としてのホームランドと、「祖国」とされるホームランドが対立的な関係にある者たちもいます。クルド人もそうです。

第一次世界大戦後の植民地分割によって「トルコ国民」であることを強制されたトルコのクルド人⁴は、「クルディスタン」というホームランドの名を口にすることを禁じられ、二つのホームランド（祖国と郷里）の引き裂かれを生きています。沖縄とその島々の人々もまた、日本という、近代になって「祖国」として課せられたホームランドと、自らが生まれ育った郷里という二つのホームランドの複雑にもつれあう関係性ゆえに、近現代の歴史の中でさまざまな悲劇を経験し、依然、その悲劇の渦中にあります。

占領がある限り、たとえホームランドに暮らしていようと、そこはほんとうのホームランドにはなりません。郷里としてのホームランドが、祖国という名のホームランドによって奪われています。ホームの安らぎを奪う祖国に、安らいで生きることできません。そのような祖国は、人間にとって決して、ほんとうのホームランドではありません。占領が続く限り、郷里の海、郷里の空がほんとうの海、ほんとうの空でないだけでなく、占領が続く限り、私たちはほんとうの祖国をももちえません。

では、人間にとってあるべき未来のホームランドとはどのようなもののでしょうか。クルドの人々にとって、あるべき未来の故郷としてのホームランド、「祖国」としてのホームランドは、そして、沖縄の人々にとって、あるべき未来の沖縄、あるべき未来の「祖国」とはどのようなもののでしょうか。

沖縄の人々もトルコのクルド人も、国籍をもち、自らのホームランドで暮らしているという意味では、国際法的に定義される難民⁵ではありません。しかし、エスニック・

が開始されたが、朝鮮高級学校は制度の対象外となっている。また、幼児教育・保育無償化や、コロナ禍での学生支援緊急給付金についても、朝鮮学校は対象外となっている。

⁴ 1920 年、第一次世界大戦で敗北したオスマン帝国と連合国の間でセーヴル条約が締結され、クルディスタンの独立が承認されたが、トルコ革命の結果成立したトルコ共和国の反発により新たに結ばれたローザンヌ条約ではクルディスタンの独立は否認され、独立運動は抑えられることとなった。

⁵ 1951 年にジュネーヴで採択された難民条約にて、難民は、「人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいと迫害を受けるおそれがあるために

マジョリティの国民と対等な政治的権利を持たず、占領がある限り本当のホームランドを持たないという意味では、比喩的に、エグザイル状態にある「難民」ということができます。そして、あるべき未来のホームランドとは、こうした「難民」的状态にある者たちからこそ展望できるのではないか。そのような思いから、今日は、クルディスタンと沖縄を結んで、「難民」的生の経験を通して未来のホームランドについてともに考えたいと思います。

呉 ありがとうございます。

クルド問題については日本ではまだ報道が少なく、私も勉強を始めたばかりですが、今お話があった通り、主にトルコ、シリア、イラン、イラクにまたがり 5,000 万人くらいが生活を営んでいる⁶という状況にあります。それだけでなくトルコの抑圧的状况から日本に逃れてくる方々もいます。

考えてみると、クルドの方たちだけではなくて、私のような在日朝鮮人も、様々な理由からある意味でそういう「逃れてくる」という経験を植民地期は当然持ちましたが、植民地が終わった後も、1948 年の「四・三事件」に関わって、70 年代くらいまで大阪の朝鮮人密集地域に済州島から逃げてくるということがありました⁷。ですので、クルドの方々と似たような、難民的な経験を在日朝鮮人もしてきたと思います。当然沖縄も多く移民を出した地域でありますので、クルドと同じような難民的な経験をもっていると言えると思います。

早速、第 1 部を始めていきたいと思います。第 1 部は、「homeland に＜難民＞として生きる」というタイトルになっています。「難民」を軸にしながら、先ほど話にあったホームランドについて改めて考えてみようというのが一つの趣旨になっています。

それではイルファンさん、よろしくお願いします。

他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々」と定義されている。

⁶ BBC (2019) によると、トルコ、イラク、シリア、イラン、アルメニアにまたがって暮らすクルド人はおよそ 2500~3000 万人とされている (<https://www.bbc.com/news/world-middle-east-29702440>)。

⁷ 日本敗戦後の 1948 年 4 月、アメリカ軍政下の済州島にて、南朝鮮単独選挙に反発した民衆蜂起が軍・警察・右翼団体によって武力鎮圧され、島民の大虐殺へ発展した事件。3 万人を超える島民が犠牲になったと言われ、多くの避難民が日本へ渡った。

2. 講演 ホームランドに＜難民＞として生きる

イルファン 今日は、クローズドで、ごく少数の方に向けてのお話となります。これから私がお話しする問題をトルコで話題にするには危険が伴います。クルド人の要求に関する議論は、トルコでは、国家によってほぼ禁じられているということを指摘しておきます。

人口 8,500 万人のトルコには、2,000 万人以上のクルド人がいると言われています。しかし、クルド人は 100 年もの間、自分たちの言語で教育を受けること、クルド人としてのアイデンティティを法律で認められること、トルコ人と同等の権利を持つこと、これらを組織的に妨げられてきました。クルド人はこれらの平等を実現するために苦心してきました。現在、トルコの刑務所には 1 万人近いクルド人政治犯が収容されています。国会議員、政治家、活動家、作家、ジャーナリスト、人権擁護者、そしてソーシャルメディアの利用者までもが投獄されているのです。

現在のトルコの右派ファシスト政権⁸は、国内はもとより日本国内においてさえ、クルド人が、クルド問題に関して、国家の公式イデオロギー以外の発言をすることを許しません。したがって、ここから 8,500 キロも離れたトルコの首都アンカラで訴追されないためには、残念ながら、私は自己検閲しなければなりません。しかし、検閲も自己検閲も、私たちが真実を語るのを完全に妨げることはできません。

また、今日は、クルドの話だけをしたいわけではありません。沖縄の先住民や在日朝鮮人その他多くの類似の民族が、多かれ少なかれ同じようなやり方で、圧政的な帝国主義政権によって抑圧されてきたのですから。私たちの声は局地的な場から発せられますが、問題の根源は普遍的です。ですから、沖縄の人々や在日の人々にクルドのことを説明するのは、はるかに容易です。同じ言語を話さずとも、虐げられた者同士はずっと容易に理解しあえます。

支配者のやり方は似たり寄ったりなので、虐げられた者たちの話も似ています。それについては後ほどお話しするとして、まず、2022 年 4 月 14 日の夜、トルコから日本に到着した際に体験した出来事についてお話ししたいと思います。

イスタンブールからドバイ経由で 18 時間の旅を経て関西空港に到着し、空港から京都へ向かうバスに乗ったとき、隣の席に座っていた青年が私に訊ねました「なぜ、日本に来たのですか？」 コロナ禍で来日する外国人がそれまでほとんどいなかったことを考えると、当然と言えば当然の質問です。私は拙い英語で、京都大学の招きで来たこと、これから調査をすること、自分はジャーナリストであることを告げました。「あなたは日本人が好きですか？」 これが隣の席の青年の二つ目の質問でした。観光客なら誰でも聞かれる質問だと思い、「もちろん、好きです」とこれもまた、さして驚きを覚えずに答えました。すると青年は訊ねました。「韓国人や中国人は好きですか？」

⁸ 現在のトルコのレジェップ・タイイップ・エルドアン大統領は 2003 年に首相に就任してから権力を掌握、2014 年に大統領に当選し、2017 年には首相を廃止して大統領制に移行する憲法改正を行った。とりわけ 2010 年代以降は、トルコ民族主義の強化が顕著にみられる。

なぜそんなことを訊くのか理解できませんでしたが、「もちろん。好きでないわけがありません」と答えると、彼は微笑んで携帯電話の画面に戻りました。それまで、日本が歴史的に朝鮮や中国と良好な関係にないことを知ってはいましたが、日本に到着してすぐに乗ったバスで受けた質問で、この緊張が依然、継続していることを実感しました。

それから数日、バスの中で青年が発したこの問いかけは、私の頭の中でぐるぐると回り続けていました。今日の講演会では、この問いかけについて考え、議論することが有効だと思います。というのも、この問いかけから、さまざまな分析が可能になるからです。

バスで出会った青年は、初対面の人物を、その人が来た国がいったいどこにあるのかも知らないまま、彼のなかで定義しようとしていました。そのために、自分が「敵」とみなしている人々と相手の関係を見極めることで理解しようと考えていました。

もし「日本人は好きだけど、中国人と韓国人は嫌い」と答えたとすれば、「クールな外国人」だったでしょう。あるいは、「日本人は初めて見るからまだ好きかどうかかわからないけど、韓国のテレビドラマは面白いし、中華料理も大好き」と言ったら、すぐに「悪い外国人」に分類されたことでしょう。「日本人も中国人も韓国人も好きだ」と言ったら、「愚かな外国人」だと思うことでしょう。バスの中の若者は、私を三つ目のカテゴリーに位置づけ、「愚かな外国人は、悪い外国人よりもまだ」と考えて、少し安心したようです。

なぜ、この青年は、外国人を知るため、あるいは自分の頭の中に位置づけるために、自分が「敵」だと思ふ者との関係を訊ねたのでしょうか。この問いかけは、私たちに何を語りかけているのでしょうか。

青年は、日本が中国や朝鮮半島に対して行った戦争を目にしたことも、それに参加したこともなく、もしかしたら、それまでの人生の中で中国人や朝鮮人に会ったことすらないかもしれません。このとき彼は、会ったことも接したこともない人たちを、どのように「味方」と「敵」に分類するのでしょうか。

このことが示しているのは、歴史をどのように伝えるかということが、後世の人間を形作ること、そして、歴史というものそれ自体が、過去の死んだものでなく、現在を形成する生きたものであるということです。国家は、歴史を次の世代に伝えることに関して極めて慎重です。歴史的な出来事を歪曲したり、あるイデオロギー的な目標に沿って過去を表象したりすることもあります。そのため、公式な国家の歴史にとどまらず、オーラルヒストリーや非公式な歴史を発展させることが非常に重要です。なぜなら歴史は、抑圧する側と抑圧される側の双方にとって、対話、戦争、あるいは闘争の実際のフィールドであるからです。

各国家はそれぞれに公式の歴史を記し、その歴史を個人に押しつけます。その押しつけは小学校教育から始まります。国家は、特定のイデオロギー的目標に沿うよう個人を操作し、形作っていかとうします。過去の敗北の仇を討ち、さらには歴史そのものに復讐するよう人々を仕向けます。民族のあいだの敵対感情がなくなるのは、

人々の心根が悪いからではなく、国家の利害から説明できることです。私は、人種差別は固定された感情ではなく、変化しうるイデオロギーであると考えています。

外国人排斥も同様です。政治的、経済的な理由で全く異なる地域から移住してきた、歴史的には反感を持ちえない「外国人」に対する「悪感情」は、固定的でも不変でも自然なものでもなく、支配者の操作によって作られた排他的イデオロギーに基づくプロパガンダから生じているのです。

現在、欧州でポピュリズム右派が急速に台頭している最大の原因は、ハンガリー⁹やイタリア¹⁰のように、右派政治家が、「難民」に対する恐怖心を国民の間に広め、それをもとにして政権を獲得したことにあります。日本でも、反韓・反中政治を通じて、同様のことをする右翼の政治家がいるというのは、私たちの知るところです。

しかし、社会にまったく罪はないのでしょうか？ 政治家や軍人だけが、すべての責任を負うのでしょうか？ それは絶対に違います。私たちは、社会は権力者に操られた受動的な要素に過ぎないと考えて失望を払拭しようとするか、そうでなければ、自分自身に希望の源泉を見出そうとします。ですが、すべての社会は、自らの社会の暴君や独裁者や、自身の手によってできた権威に、直接的・間接的に協力しているのです。私たちは悪を変える力を持っています。もし私たちがそれを変えようとしなければ、もし私たちが権力者たちによって生み出された抑圧と残虐に対して傍観者のままだいなるなら、私たちは悪や差別や抑圧や搾取の協力者となるのです。

もちろん、民族的アイデンティティ、肌の色、性別、性的指向、宗教的信条、階級的地位、文化、言語などの理由で人々を辱め、搾取し、抑圧しようとする支配者たちに対して、抵抗もまた紡がれていることを忘れてはならないでしょう。希望はそこにあります。抑圧者に対抗する被抑圧者は、時に反乱によって声を上げ、時に文学、音楽、言葉、物語を通して声を上げるのです。

帝国崩壊後の社会で、特に帝国時代に支配する側であった人々は、彼らの帝国が没落したことの屈辱を晴らすためにさまざまな標的を選び、さまざまな民族を敵と見なしました。私の出身地であるトルコは、1299年に建国され、1922年に崩壊したオスマン帝国の残骸の上に築かれた国です。オスマン帝国が崩壊したとき、支配者たちはアルメニア人、クルド人、ギリシャ人を標的にしました。1915年、アルメニア人はオスマン帝国の地で大量虐殺に遭います¹¹。ギリシャの人々は、この国の領土から追放されました¹²。1923年、オスマン帝国時代に残されたアナトリアの地形を利用して建国されたトルコ共和国は、そうした血塗られた遺産を受け継いでいます。トルコ人という単一の民族的アイデンティティに基づいて構築されようとした新生国家トルコでは、

⁹ 2010年以降政権を担っているオルバン・ヴィクトル首相は、移民排斥を訴えている。

¹⁰ 2022年9月、ジョルジャ・メローニ氏率いる極右「イタリアの同胞」を含む右派連合が上下両院で議席の過半数を獲得し、右派政権が発足した。

¹¹ 第一次世界大戦中のオスマン帝国で、1915年から1923年にかけて、当時の青年トルコ党政権によるアルメニア人の強制退去・虐殺が行われた。犠牲者は100万～150万人と見られている。

¹² 1923年、ギリシア＝トルコ戦争の結果結ばれたローザンヌ条約により、トルコのキリスト教徒、ギリシャのイスラーム教徒がそれぞれギリシャ、トルコに強制的・恒久的に移住することとなった。

トルコ人のアイデンティティから外れたすべての層、特にクルド人が標的にされたのです。トルコ共和国成立直後からクルド人を標的とし、100年にわたり反クルド人政策が進められてきました。

このような方法は、帝国崩壊後の国民国家に共通するものでした。日本やドイツも同じようなことをしています。ヨーロッパ諸国でも、植民地化した国々で同様のことが行われました。多様性を破壊し、そこで破壊しきれなかったものは同化政策で解消することが国民国家の基本政策であり、多くの民族がその重い代償を過去にも、そして今でも支払っています。

沖縄に来た私が、過去から現在に至る沖縄の人々の苦しみを理解することは、クルド人として生きてきた経験ゆえに、難しいことはありませんでした。私たちは非常に離れた場所に住んでいますが、同じような慣習や抑圧の犠牲者であるため、お互いのことを比較的容易に理解することができるのです。

国民国家の抑圧政策はよく似ていますが、抑圧される側の戦略は異なります。例えばトルコのギリシャ人のように、他国へ移住・逃亡することで生き延びている民族もいれば、支配者の顔に似せ、同化することで殺戮や殲滅を免れる民族もいます。武力で抵抗することによって自らの存在を主張しようとする民族もいれば、音楽、芸術、文学、書かれたものや口承の文化といったものを通して、その存在を主張しようとする民族もいます。メキシコ先住民の解放のために戦うサパティスタ民族解放軍 (EZLN)¹³のリーダー、マルコス副司令官は、「我々の言葉は我々の武器である」と言って、このことを指摘しました。

トルコのクルド人は、これらの方法すべてを同時に使っています。トルコでは、一部のクルド人グループが設立した武装組織が反乱を起しました。トルコにはクルディスタン労働者党という組織があり、40年前からこの反乱を続けています。クルド人の中には、国家による抑圧のために世界各国に移住し、そこで自分たちのアイデンティティや文化を守ろうとする人もいます。トルコのクルド人のなかにはトルコ人に同化し、トルコ人のふりをして生活を続けている人もいますが、大多数のクルド人は、合法的な政治闘争、音楽、文学、文化活動などを通して、自分たちの存在を維持し、自分たちのアイデンティティを保とうとしています。

同化政策は、トルコが1930年代以降、クルド人に対して組織的に行ってきた政策の一つです。トルコは、クルド人に自分たちの言語や文化を忘れさせ、自分たちはトルコ人だと思い込ませたいという意図から、様々な方法でクルド語を禁止しています。現在、トルコのSNSのアカウントを開くと、イスタンブールの目抜き通りであるイスティクラール通りでクルドの歌を歌うストリート・ミュージシャンまでが拘束されたという投稿も目にします。トルコの同化政策は、法律や禁止令だけで行われているわけではありません。クルド語を「不適切で、古風で、原始的な」言語であるとして組織的に否定しています。こうすることで、クルド人が母語を恥じて、それを捨ててしま

¹³ メキシコ南東部チアパス州を中心に活動する組織。1983年設立。対話や音楽、アートを通じて、先住民の差別や貧困問題解消を訴えている。

うことを狙っているのです。同じような問題は、沖縄の人たちにも当てはまると思います。だからこそ、マルコス副司令官の「我々の言葉は我々の武器である」という一文が大きな意味を持つのです。

私の考えでは、国民国家体制は、人間の本質に適うにはあまりにも狭隘です。人間も他の動物と同じように世界を移動し、動き、環境を変化させていく存在です。特に、人類の移動性が格段に向上した現代において、国民国家の壁を人々に押し付けることはより困難になっています。このような困難を克服するために、国民国家体制はより大きな抑圧装置、より権威主義的なシステムや抑圧政策を導入します。しかし、人々は国家が築いたこの壁を壊そうと抵抗するのです。

国際移住機関の2019年のデータによると、現在2億7,200万人が移住しています。この数字には国内での出稼ぎ者は含まれていません。つまり、日本政府やアメリカの政策によって困窮し、仕事を求めて東京や大阪に渡った沖縄の人たちは含まれていません。トルコの抑圧的な政策のために、ディヤルバクルからイスタンブールへ、トルコの都市から都市へと移住した数百万人のクルド人も含まれていないのです。

現在、2億7,200万人が世界中を移動しているという事実は、何を語っているのでしょうか。それは、民族、信仰、肌の色、性別の異なる膨大な数の「移民」が、常に国民国家の国境を越え、それを無意味なものにしようとしているということです。

今日、私たちは、第二次世界大戦後に確立された新しい世界秩序が破綻しているのを目の当たりにしています。難民の権利に関する1951年のジュネーヴ条約¹⁴は、はるかに遅れています。現在、何億人もの人々が、生まれ故郷とは異なる土地に暮らし、その居住国では「難民」であるために、屈辱を受け、差別され、あらゆる問題の元凶と見なされています。難民の危機は、次第に国民国家システムの危機へと変容しています。

ここで国家は再び、難民に対する地元住民の気持ちを煽り、人種差別を道具として利用します。人種差別を広めることによって、「外国人」が自分の国に来ないようにしようとするのです。そのとき、この破局に対処する方法は一つしかありません。地元住民と外国人との連帯・融和を図る対抗政策を展開し、そこから反対運動を紡ぎ出すことです。

埼玉のクルド人青年に「いつかクルディスタンに帰りますか？」と尋ねると、彼は「いや、絶対に戻らない」と応えました。「でも、じゃあ、どうしていつもクルディスタンが恋しいと言ったり、ホームシックになってクルドの歌を聴いたりするんですか？」と私が重ねて訊くと、彼はこう答えました。「それは、私の出身はここでなくてクルディスタンだと、日本人によっていつも思い知らされているからです」

私の講演のテーマは、「ホームとは何か、祖国／ホームランドとは何か」という問いかけについての予定でした。私が日本で見たことから導き出した結論は、「祖国とは、生まれたところのことではなく、連帯を受けとることができるところだ」ということです。そのため、私たちは、現在とは異なる世界を夢見なければなりません。国境が

¹⁴ 注5 参照

なく、戦争や搾取がなく、独裁政権が廃止され、外国人と地元住民の対立が煽られない自由な世界！そんな世界は夢かもしれませんが、チェ・ゲバラ¹⁵はこのように言っています——Be realistic. Demand the impossible（現実的たれ。不可能を求めよ）！
ありがとうございました。

¹⁵ アルゼンチン出身の革命家。カストロと共にキューバ革命を成功させ、その後南米各地で革命運動を指導した。

3. パネルディスカッション

仲里 仲里です。今はフリーでありますけど、仲間たちと一緒に沖縄の若い世代の言論の場をいかにして作り上げていくかを、雑誌の編集や発行を通して考えています。また映像や写真なども含めて、批評をしたり、思想や文学にも門外漢的に介入したりしています。

クルドのことについてはほとんど知らないというのが正直なところですが、ただ、1991年の湾岸戦争のときに、アメリカ海兵隊が沖縄から派兵されたり、沖縄基地が湾岸戦争と関わっていくことを直に見聞きさせられたり、2001年の9・11の、いわゆる「同時多発テロ」のときの、アメリカがアフガニスタンやイラクへ侵攻をしていったときなどは、アメリカ軍が世界中に展開している重要な基地では最高度の警戒がなされていますが、沖縄基地でも「コンディション・デルタ¹⁶」が発令され、厳戒態勢になっていたりしました。「コンディション・デルタ」というのは、いくつかの段階がある警戒レベルでも最高度のレベルがそういわれていて、アメリカ統治を知る私たち世代などにはコザ暴動のときに発令された「コンディション・グリーン¹⁷」を思い出させました。当時はそう呼ばれました。「コンディション・デルタ」のときは、沖縄の基地が二重三重にガードされた光景を見せつけられました。ゲート前の前面にはたしか基地に雇用された沖縄人ガードと沖縄県警が、その後ろには日本「本土」から派遣された警察官が備え、さらにその背後には武装米兵が配置され基地をガードしていた光景が出現したのです。

アメリカと日本と沖縄の関係が「コンディション・デルタ」という戒厳体制を通して、まさにアメリカ軍基地が沖縄社会に銃口を向けることが可視化されたときでもあったのです。“太平洋の要石”とされた沖縄基地はアメリカの戦争に加担させられてきましたが、湾岸戦争やアフガニスタン・イラク戦争を通して、これまで見えてこなかったクルド人やクルドの問題が少しずつ視野の中に入り出してきたときでもあったのです。とはいっても、最初に話したように、正直なところ、クルドやクルド人問題について深くは知らないこと、そのことを前置きして、今のイルファンさんの話を伺い、私なりに応答できればと思っています。

個人的な体験になりますが、私の中国人の友人がトルコ系クルド人と結婚し、沖縄に来たときに、一晚歓迎の夕をもったことがあります。彼は音楽家で、タンブール¹⁸を演奏し、自分で作曲した歌を披露してくれました。そのとき初めてタンブールという楽器を目にしたことやクルドの音楽を聴かせてもらったということがありました。

¹⁶ アメリカ軍基地では、テロリストや危険勢力に対する危険度が5段階で示されている。デルタはその最高レベルで、テロリストの攻撃があったとき、または特定の地域に対するテロリストの攻撃が迫っていると判断されたときに発令される。

¹⁷ 1970年、沖縄県コザ市（現・沖縄市）で発生した、アメリカ軍車両および施設に対する焼き討ち事件。直接の契機はアメリカ軍人による交通事故だが、背後にはアメリカ施政下での圧政・人権侵害に対する沖縄の人々の不満が存在した。事件発生直後、アメリカ軍は、アメリカ兵に対し、コザ市への立ち入りを禁止するコンディション・グリーンを敷いた。

¹⁸ 西アジアから中央アジアにかけて広く用いられる、ネックの長い弦楽器。

イルファンさんの話の最初に、日本に着いて、大阪から京都に向かうバスの中で、日本の若者からいきなり、「日本人は好きですか」の次に「韓国人や中国人は好きですか」と問われたという体験が紹介されました。これを聞いて、日本における国民意識の中に現在も紛れ込んでいる、折り重なっている歴史意識を、図らずも若者の問いによって露出させられたんじゃないかということでした。

そのことで、すぐに思い出したのが、つい最近亡くなった森崎和江さんのことでした。森崎さんは戦前日本から朝鮮に渡った両親のもと、朝鮮で生まれ育った植民地二世ということになりますが、女学校に進学するために日本に来るわけですが、その後北九州の炭鉱地帯で谷川雁¹⁹や上野英信²⁰らと一緒にあって、『サークル村』²¹活動にかかわっていくわけですが、それまでの日本における労働概念や、朝鮮を見る目に欠けていた、女性や植民地体験からの視点から柔らかく、かつ鋭い言葉を残しています。彼女の本に『異族の原基』²²という一冊があって、その中に収録された論考の冒頭に紹介されたエピソードがあります。そのエピソードとは 1970 年に刊行された叢書『わが沖縄』の第六巻『沖縄の思想』²³に寄せた「民衆における異集団との接触の思想——沖縄・日本・朝鮮の出逢い」に出てきます。イルファンさんの話で思い出したのはそのことです。若い労働者たちとひろげていたアジア地図のなかから一地方だけ買えとなったらどこを選ぶのか、と尋ねたところ、中国、インド、ベトナム、中近東などが買われていって、最後に残ったのが沖縄と韓国だったということです。森崎さんはこのエピソードを、民衆間の接触という視点から日本の民衆意識の閉鎖性を問題にしている、その原因を近代日本のアジアへの膨張政策にみているように記憶していますが、こういうことにもなるのではないのでしょうか。つまり、底辺労働者が集まる炭坑地帯においても民衆の意識の中に折り畳まれている、植民地主義や排外主義の負の遺産というものを、図らずも浮き上がらせた、ということではないのでしょうか。バスの中でイルファンさんに聞いてきたという日本の若者の言葉にも、今もなお出逢いを疎外する意識が残っているということだと思ったりしました。

～・～ ～・～ ～・～

今回のシンポジウムは、クルドと沖縄をいかに繋ぐかということですが、イルファンさんのコメントから、私なりに感じたことを挙げると、3 点くらいあって、一つは、帝国の崩壊と国民国家の形成の過程の問題です。その形成過程で排除されるマイノリティーの抵抗の方法があるとすればそれは何なのかという問題点を含めて提起されたのではないかと思います。二つ目は、国民国家の危機の話をなされましたけど、繋留装置としての国民国家の限界を超えていく難民という視点、あるいは難民の思想をど

¹⁹ 詩人。1923 年、熊本県生まれ。詩作のかたわら、福岡県筑豊の労働運動を指揮し、新左翼や全学共闘会議などに影響を与えた。『原点が存在する』（1958）など。

²⁰ ルポルタージュ作家。山口県生まれ。福岡県筑豊の炭鉱労働者として働きながら、炭鉱労働者の日常を文学として描いた。『追われゆく坑夫たち』（1960）など。

²¹ 1958 年から 1961 年にかけて発刊された、九州・山口の炭鉱労働者を中心とする自立共同体・サークル村の機関誌。分断・格差を乗り越える、横断的な連帯と交流を目指した。

²² 森崎和江（1971）『異族の原基』大和書房。

²³ 谷川健一編（1970）『叢書 わが沖縄 第六巻 沖縄の思想』木耳社。

のように紡ぎだしていくのか、ということだったと私なりに捉えています。

帝国の崩壊と国民国家の形成ということで言えば、私などがあらためて付け加えるまでもないことではありますけれど、第一次世界大戦の後に、トルコやイラク、シリアなどの国家が形成され、国境線が引かれることによって、それまでクルドの土地に住んでいた人たちが、いくつもの国家に分断され、排除されていくということがあった。そこで言えることは、国民国家が包摂という繋留装置として機能していく、そのことが、それまでの国家を媒介した繋がりとは別の形で接触と共同性を紡いでいた人々を排除していくことになったということだと思います。

国民国家の包摂・繋留の仕方としていくつか例が出されたわけですが、植民地支配の世界的に共通していることの一つが同化政策です。その同化主義のまっ先にターゲットにされたのが言語で、禁止と規律訓練をともなった文化的暴力として行使されていきます。非常に厄介なのは、国家の植民地政策としての同化主義を、その地域の人々が自ら内面化していく、その有り様だと思います。このことは、沖縄、あるいは在日朝鮮人などを含め、日本の植民地化された地域にも共通しているのではないかと、イルファンさんもおっしゃったわけですが、まさにその通りだと思います。繋留装置に同化されていく過程と、それを内面化していく“自己植民地”という厄介な問題が残ることですね。

またイルファンさんは、国家の包摂や繋留に対する抵抗のあり方についても話されましたし、国や地域によって差はあるでしょうが、共通性も多いはずで、その共通していることに、例えば禁止された地域言語を取り戻していくとか、文学作品を国語とは違うマイノリティーの持っている言語によって表現していく、その表現の中に、抗いというものを書き込んでいく、そうすることによって国家の文脈というものを壊していく、変えていくことに繋がっていくことになるはずで、

三つ目は、音楽の話とかかわることです。沖縄においても、沖縄の言語や音楽、芸能などは、日本への包摂過程でタブーにされ、禁じられてきたわけですね。しかし、それにもかかわらず、先ほども言ったように、抵抗のあり方として見ていけば、禁じられていた言語や音楽や舞踊などの身体表現によって試みられ、実際多くの作品を残していったということが、沖縄の近代や戦後の歴史、とりわけ出稼ぎや移民などによって出郷を余儀なくされた人々によってなされていった、と言えます。

一つ紹介したかったのは、これは第2部で沖縄側から出される演目で、「南洋浜千鳥」を披露してくれるということになっているようですので、その時に述べられるでしょうから、ここでは詳しくは触れませんが、この唄と踊りは戦前、南洋群島に移民した沖縄の芸人がもともとあった「浜千鳥節」を翻案したり、振り付けたりしたものです。ここには移動と翻訳という課題を発見できるのではないのでしょうか。

3点目は、今指摘したこととかかわりますが、近代の国民国家に繋留される過程で、土地から引きはがされていく移動民を生んでいきます。沖縄は他の地域にはみられない多くの移民を輩出した地域として知られています。移民先としては、ハワイをはじめ北米やラテンアメリカ各地ですが、国外への移民にとどまらず関西や関東にも出稼

ぎのために移動民となって土地を離れ、出稼ぎ先では沖縄人集落を形成していきました。それから、南洋群島にも、沖縄から多くの人たちが海を渡り、その数は日本人移民の約6割を占めていたといわれます。そうして海を渡った移民たちをなぐさめたのが沖縄の唄や踊りでしたが、それだけにとどまらず移動の経験によって「新作民謡」というジャンルを生み出してもいきます。移動によって生まれた音楽、移動によって生まれた身体表現というものを残していくわけですが、その一例が先ほど少しだけ紹介した「南洋浜千鳥」であり、また「南洋天川」と呼ばれる踊りだったりするわけです。

そのほか数多くの例を挙げることができます。「新作民謡」と言われるように、新しく生み出していきますが、トラディショナルな民謡を、独自に翻訳し作り替えてもいきます。そうした試みを実践した一人に、戦前大阪への出稼ぎの経験を持ち、戦前・戦後を通して琉球民謡界を代表する一人である普久原朝喜がいます。この方は、「チコンキーフクバル（蓄音器・普久原）」と親しみを込めて呼ばれたように、マルフクレコードというレーベルを立ち上げて、沖縄の民謡や自作をレコーディングし、出稼ぎ先や移民先で差別や偏見などにあい不遇をかこっていた人たちの郷愁を慰め、生きる力に変えていったそうです。こうしたトラディショナルな民謡の紹介にとどまらず、作詞・作曲したり翻案したりしていくわけですが、これは、移り住むことによって、移動することで、「ホームランド」というものを新たに創造していく行為でもあったんじゃないでしょうか。

時間がないので、そうした出稼ぎや移民によって生まれた唄の果実をアトランダムに紹介して、締めくくりたいと思います。金城実さんという琉球民謡歌手がいますが、彼のアルバムに、『南洋をうたう』という南洋移民の唄を集めたものがあります。それから、大島保克&オルケスタ・ボレの『今どう別り』という、移動民の唄を拾ったアルバムがあります。他にもありますが、ここではその二つと、先ほど触れた普久原朝喜が作った楽曲の中から、いくつか拾っておきます。「移民小唄」、「南洋小唄」、「パラオ小唄」、「シンガポール小唄」、「ペリリュー島哀歌」、「アンガウル島巡り」、「南洋帰り」、「南洋浜千鳥」、「移民くどうち」、「布哇節（ハワイぶし）」、「新港節」、「サイパン（南洋）数え唄」、「台湾行き数え唄」、「懐かしきサイパン」などです。移動することによって唄が生まれ、その生まれた唄に込められている沖縄びとの記憶と経験に、「ホームランド」の一つの想像的にして創造的な例というか、あり方を発見することができるのではないか、そう思っています。

話が尻切れとんぼになってしまいましたが、時間もオーバーしてしまったようです。イルファンさんの話にうまく応答できたかわかりませんが、以上で私の話としたいと思います。こちらこそありがとうございます。

新城 今、イルファンさんのお話と、それについての仲里さんのコメントを聞いて、有り体に言うと感じ動していて、あまり私の方からこれ以上言うことはないなと思っていました。今、仲里さんが非常に体系だった素晴らしいお話をされたので、私の方は、思いついたことを切れ切れにお話ししたいと思います。

仲里さんが謙虚に、「クルドのことはあまり」とおっしゃっていたけれど、それどころか私の方は全く無知です。昨日、イルファンさんやセルダルさんからクルドの話のいろいろ聞いて、本当に初めて知ることが多いです。例えば、世界中に離散している方、そして日本に実はかなりの方がいて、けれど、一昨日初めて難民認定がされて、この国の凄まじい酷さを痛感します。『牛久』²⁴でよく知られているように、入管で、ほとんど拷問に近い扱いが行われていることに関しては、知っているつもりでいたのですが、クルド難民の方たちのことを想像すると、今も胸いっぱいになります。イルファンさんが、ここでこの人数でゆっくり話せることが嬉しいとおっしゃっていたのが胸に染みっていますが、それは話すこと自体が危険だからですね。「クルディスタン」という言葉を使うこと、あるいは、ようやくつい最近解禁されたとはいえ、音楽を自由に演奏すること、そうしたことさえ難しかったということを考えても、人々の秘密が守られる場所が必要なんだと思い知らされました。

ここから急に沖縄のことに結びつけていきたいと思っているのは、沖縄における「秘密の言葉」の位置づけです。ある言葉を使いながらそれを暗号化する力とか、欺く力とか、ある言葉を使うことですね。先ほどの話を聞きながら、そういえば秘密の言葉で運動を作ってきた沖縄をも重ねることができるのではないかと思います。たとえば、阿波根昌鴻²⁵さんのことを思います。伊江島闘争²⁶で、奪われた米軍の土地をどうにか取り戻そうとして、今まで 60 年、70 年続いているわけですが、その方たちが、1955 年くらいから運動を立ち上げていきました。その伊江島の戦いの中で、阿波根さんたちが気にしていたのが、スパイなんです。つまり、自分たちの喋っていることがすぐに米軍にバレるということを知っていて、みだりに友人たちの名前を言わないとか、あるいは抵抗の言葉を暗号化して、自分たちを支援する人にしかわからないような言葉を使うわけです。そしてそれを、陳情規定 10 か条として決めて、歌にしたりもしていました。やはりそこにもイルファンさん、そして仲里さんがおっしゃっていたような、抵抗が身振りとなり音楽となりということがある。「翻訳の言葉」になっている。

そこでまた自然に繋がるのが、阿波根さんが移民帰りだったという歴史です。まず 1930 年代にペルーに行って、その後散髪屋とか——沖縄の人はどこへ行っても散髪屋ばかりだった時代です——、洗濯屋をしながら、それでも貧乏なので、その後キューバに行き過ぎて、食うや食わずという形になって伊江島に戻ってきて、でも戻ってきた伊江島で日本の戦争に遭って、息子さんを亡くしてしまいます。その後、米軍にとられた土地を取り戻そうという運動をしていくんです。そうしたときに、密か

²⁴ 2022 年公開のドキュメンタリー映画。トーマス・アッシュ監督。茨城県牛久市にある東日本入国管理センターに収容された人々の証言を通し、日本の入管収容所の実態を捉えている。

²⁵ 反戦運動家。戦後、アメリカ軍施政下の沖縄で、アメリカ軍の土地収容に対する反対闘争を展開した。

²⁶ 1955 年 3 月、アメリカ軍は、伊江島などで強制土地接収を敢行した。抵抗する住民を武装兵が追放し、ブルドーザーを用いて土地接収を進めたことから、「銃剣とブルドーザー」と呼ばれる。阿波根昌鴻らが本島で非暴力による反対運動を行い、その後、1956 年以降の島ぐるみの土地闘争に影響を与えた。

に、けれど、持続的にある言葉を自分たちで生み出していって運動を作っていくわけです。そこには、移動の中で作られていく「移動する共同体」というのがあったんじゃないかなと思いました。それは今の沖縄にも繋がっているんじゃないかなとも思いました。

そこでまた難民ということに繋がるのですが、伊江島闘争が行われている全く同時期に、沖縄のすぐそこにある伊佐浜というところで連動した土地収奪が起きて²⁷、その集落にいた人々は完全に村を追われます。潰されてしまって、ほぼ強制的に村を追われます。今度は、戦後の1956年に南米に集団で移民します。移民せざるを得ないという形なわけです。その伊佐浜集落の人たちは、思いを伝える文章の中で、自分たちのことを「難民」と書いているんです。沖縄は戦後一度も難民認定は下りていません。最初に岡真理さんが言ったように、政治的には、国籍もある、住む場所もある以上、難民条約上は難民になるはずがないんですけれど、自分たちはそれだからこそ難民なんだと読めるようなことを書いているんです。そう考えてみると、ある種の類似性として、クルディスタンと沖縄が見えてくるなと思いました。

ここからまた、私の話は途切れ途切れになるのですが、今度は、似ていないところもあるということをお話したいと思います。それは、仲里さんのお話の後半部分に出てきた植民地化の問題です。沖縄自身が植民地の側に立ったという経験があって、そのことをどう考えるかということです。私自身、そのことにあまり詳しくないのだけでも、クルドの問題が始まるときにオスマン帝国の解体が起きたということを昨日から聞いていて、そのときに大虐殺があったということを聞いて愕然とするのですが、それは、ちょうどその頃沖縄は逆に、日本帝国の内部にきっちり編入されていた時期だからなんですね。1920年代はある意味非常に希望を持って、日本帝国の内部に入っていくって、南洋や南米に出かけていった。つまり、沖縄のこの貧困は日本という国家の内部に包摂されることで解決されるはずだという幻想があったはずなんです。今から100年前の1920年代は、日露戦争に勝ち第一次世界大戦でも勝った、だから南洋にも行ける——ドイツから南洋諸島を奪いますから²⁸——、南米にも行けるという形になって、クルドが追われているそのときに、沖縄は追われる立場ではなく、今度は国家に編入される喜びを感じたという気がします。話はそういう単純なものではないですが基本はそう言えると思います。ところがそのあとが大変で、1945年には日本が敗戦する。そこでアメリカに今度はある意味変な形で編入される。そしてアメリカについていけばなんとかなるかと思ったならなんともならない。今度は、基地が残ることになるわけです。今度は、日本に帰れば、この国家でなくあの国家に属することになればなんとかなると思って日本にいったところ、今のような悲惨な状態になる。じゃあ沖縄はどこへ行けばいいのかと言ったときに、おそらく今、沖縄の中で起きている一つのあ

²⁷ 1955年3月、宜野湾伊佐浜で立ち退きを通告された住民は、座り込みで抵抗。アメリカ軍は強制接収を行い、多数の逮捕者・負傷者が出たと同時に、ブラジルやボリビアへ移住した家族もあった。

²⁸ 第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約で、戦前ドイツ領だった赤道以北の南洋諸島は、日本の委任統治領となった。実質的には日本の植民地となったため、多数の日本人が入植した。

り方として、分離独立だという意見や動きもやはりあると思います。どの国家に属しても自分たちが苦しむならば、沖縄自身の国民国家化によって乗り越えるという意見がかなりはっきり見えてきた。それがそんなに大きな意見であるわけではないものの気分としてそれが大きくなっているのかなという気がします。私が感じるのは、この流れには、いずれの場合でも国家の建設が、国家への帰属が、あらゆる最終的な解決になるのだという性急な希望があると思います。けれど、先ほどのイルファンさんの話、仲里さんの話を聞いていると、いや、そこが落とし穴かもしれないと思うんですね。もしかすると、ある国民国家の国境を我々自身が引き直すのだとなったら別の虐殺、内戦のようなものが近い将来に準備される危険があるということを、歴史から学ぶことを考えてもいいのではないかと思います。

昨日、一昨日とイルファンさんたちのお話を伺っていて、非常に印象的だったのは、クルドの中の抵抗運動も大きく分ければ二つあって、分離独立を求める運動と、もう一つは分離独立を求める形ではなく、強化された形での自治を求める運動があるという点でした。イルファンさんたちをはじめとして、今、戦っている多くの方たちが、分離独立ではない、大きな自治権に根ざした社会の構成を目指しているということを聞きました。すごく示唆的な話だと思いました。さらに印象的だったのは、イルファンさんが「分離独立」と公の場所で言っている、実はトルコ政府はそれをそんなに恐れてはいないと話されたことです。ところが、大きな声で「自治」と言うと、それが拷問の対象にすらなる。「国家」という体制が恐れているのは、国家内部に現れる別の「自治」という形態であって、それは、国家の中に、国家とは違う秩序を持った共同体が、ワタンみたいなものがいくつもできてきて、それが繋がりを持って、国家ではない新たな支援の形、人が人を支援し合うような、まるで難民がお互いを支え合うような社会が形成されること、これが実は国家が一番嫌がるもののような気がするんです。

私が思うのは、沖縄の中でもありうるということです。伊江島の話、伊佐浜の話もしましたし、現代で言えば、辺野古の戦いがありますし、もちろんずっと続いている高江の問題²⁹もある。あるいは、場所に限定されなくても、性暴力との戦いもあれば、貧困との戦いもある。いくつもの運動が接しつつ、別の戦いの中にいるのだけれども、分離しないで、それぞれのメンバーも、それぞれが重なり合って、いくつかの運動によってなる共同体を作り上げているのではないかなという気がします。それこそが、国境を持たない国や、国境というものに限定されないような、あえて言えば「祖国」と言いますか、それは「祖」というもの、「先祖」というものに必ずしも限定されないまとまりであってこれからの共同体のあり方なのではないかなと思いました。そのときには、いつでも必ず、秘密の言葉、密かな音楽や、暗号のような詩というか、そのようなものがいくつも生み出されているのではないかなと思います。イルファンさんや

²⁹ 沖縄の北部訓練場の過半を返還するにあたり、返還される区域に存在するヘリコプター着陸帯（ヘリパッド）を移設するため、高江に新たに 6 ヶ所のヘリパッドを建設する計画に対し、自然保護などの観点から、住民が反対運動を展開している。

仲里さんの話を聞いていて、第2部で聞くことのできる音楽や詩といったものの中に、そのヒントのようなものがいくつも隠されているのではないかなと思って、今日はそれを皆さんと話していければと思います。以上です。

呉 ありがとうございます。

新城さんのお話では、「秘密」という言葉が一つ中心となっていたと思います。少しだけ私の話をする、私の父と母の世代は秘密の言葉が朝鮮語となります。朝鮮語で秘密の話をする。たとえば「あの人（朝鮮人）もどうやら密航者らしい」、といったことを朝鮮語で話したりします。だから、日本社会においては言語（朝鮮語）が秘密化していくというところがありました。その一方で、私の世代になってくると朝鮮語を使えない世代が多くなってくので、どうしても日本語で喋る。そうすると我們在日朝鮮人にとっての秘密がどんどん流出していくということが起きます。その点で新城さんがおっしゃっていた、秘密をいかに日本語にこめていくのかが重要になってくるようにも思います。ホームランドも、考えてみれば「秘密」とすごく関わりあうところが実はあるのではないかな。わかる人にはわかる、という形で暮らしているその地がホームランド化していく、といった側面もあるような気がします。

以上、イルファンさん、仲里さん、新城さんからお話いただきましたけれど、イルファンさんの方から、お二人の話を受けて、コメントがあればよろしくお願いします。ありがとうございます。

イルファン みなさんが間接的に触れておられました、国民国家が支配民族以外の言語を禁止したり、同化させたりする政策というのは、記憶や思考を妨げることも意図しています。自らの言語やことばを忘れると、その言語やことばに込められている思いも、その言語を通してならば意味を見出すことのできる概念も、衰弱してしまいます。クルド人は自分たちがどれだけ同化しているかを測るために、「どの言語で夢を見る？」と訊ねあいます。

自分のことばを忘れたり、自分の言語を恥じたりすることは、人々が自分たちの歴史や文化との関係や繋がりを断ち切ることを意味します。自分の言語のために抵抗すること、自分の言語を主張することは、自分たちの存在を主張することでもあります。

私とセルダル・ジャーナンが日本に来たとき、私たちは全く知らない言語の国にいることに気づきました。私は英語を少しだけ話せますが、セルダルは英語もあまり知りません。しかし、京都を訪れたとき、宿泊したホステルで大阪から来た音楽家の女性と出会い、日本語も英語も話せないセルダルと、クルド語もトルコ語も話せない彼女は、一緒に歌いはじめました。そのとき、音楽は世界の共通語だと感じました。その後、朝鮮学校を訪問した際、セルダルが在日朝鮮人の子どもたちと即興で一緒に音楽を演奏し、音楽で対話を成立させたことで、私はこのことにさらなる確信をもつようになりました。

このように言うこともできるでしょう。たとえ国家が、被抑圧者の言語を破壊することに成功したとしても、人々から決して奪うことのできない共通の言語があると。

沖縄のことばを忘れてしまっている沖縄の人が、東京の街を歩いていて偶然耳にしたストリートソングによって、自分の過去、「故郷」への精神的、感情的な旅へと誘われることもあるでしょう。この点で音楽は、多くの政治的な演説よりも効果的な言語だと思います。1970年代、クルド人は弾圧され、自らの言語を禁じられました。クルド語を話すことが禁じられていたのです。しかし、40年間武装闘争を続け、23年間投獄されているクルド労働者党の指導者アブドゥッラー・オジャラン³⁰は、インタビューの中で、クルド音楽を演奏するアルメニアのアーティスト、アラム・ティグランに言及しています。オジャランがまだ大学生で、武装蜂起をする前のこと、ある日、アンカラでラジオから聞こえてきたティグランの歌声を聴いて、オジャランの心は一気にクルディスタンに運ばれました。「この声は死んではならない。常に自由であり続けなければならない」とオジャランは言っています。

人々は、国境、民族的アイデンティティ、信念、その他多くの境界を越える、水のような、空気のような、共通のことばを持っています。音楽という、権力者がそこに壁を作ることができないこのことばは、私たちにとって希望の源となるはずです。

³⁰ クルディスタン労働者党 (PKK) は、1978年にアブドゥッラー・オジャランを中心に結党された組織。当初はマルクス・レーニン主義に基づく独立したクルディスタン国家を構想し、1984年よりトルコ軍と抗争を始めたが、1999年のオジャランの逮捕以降、下からの民主的な自治を行う連邦制の実現を掲げている。

4. 質疑応答

質問者 新城さんが言われていた、クルドの人たちが戦いの中で選択しつつある自治権の運動の動きを、もう少し沖縄で知りたいと思います。今日のお話と結びつけるのであれば、国民国家の内側でなくても、いろいろな拠点を設けながら、クルドの人々が、ましてや沖縄の話をしているのであれば沖縄の人々が——私はカリブのプエルトリコの研究をしていますけれど、プエルトリコの人々もアメリカ本土のなかに——創造的にそのような自治の空間を、ホームランドと呼べるような政治の空間を出現させていくような、そういう起爆力的なものが、ロジャヴァの革命³¹と呼ばれている動きの中に潜んでいるように期待して、私たちは見ているんですけど、もう少しその辺りの話をお聞かせください。

イルファン 国際社会は、シリアのクルド人が ISIS³²と戦った事実を認めています、シリアのクルド人の物語はそこから始まったわけではありません。シリアのクルド人は、2004 年にダマスカス政権に対する組織的な闘争を開始しました。

2004 年 3 月 12 日、シリア北部のクルド人都市カーミシュリーで行われたサッカーチーム「ファトワー」と「ジハード」の試合中、クルド人ファンがダマスカス政府のクルド人弾圧に抗議するスローガンを叫びました。それに対してアラブ人ファンが対抗スローガンを叫び、試合会場で始まったこの騒動は、シリアの多くの都市に広がり、衝突で 52 人が命を落としました。

これは、シリアのクルド人が反乱を起こした史上初の試みでした。それまで、シリアのクルド人はまとまった組織を持っていませんでした。シリアではあらゆる政治組織が禁止されていたからです。実は、クルド人は 2003 年に PYD（クルド民主統一党）という非合法組織を立ち上げていましたが、あまり活動的ではありませんでした。しかし、2004 年の蜂起をきっかけに、PYD はクルド人の間で急速に組織化されるようになり、2011 年 3 月にシリアで内戦が勃発したときにはすでに、クルド人は PYD の傘下で組織化されていました。ただし、その時までは武装した組織ではありませんでした。

シリア内戦が始まると、PYD は国内の左派、社会主義、民主主義のアラブ人グループに共闘を呼びかけますが、それらのグループは、クルド人が差し出した手に応じませんでした。彼らは、たとえクルド人がダマスカス政権を打倒したとしても、100 年間市民権を持たなかったクルド人にその権利を認める約束はしようとはしませんでした。その後、イスラーム主義集団が反体制派の中心となり、次第に ISIS やアル＝カーイダ

³¹ シリア内戦下の西クルディスタンでは、2012 年 6 月にアサド政権軍がクルド人居住区から撤退して以降、北部及び東部シリア自治行政区（ロジャヴァ）が成立し、直接民主制、男女平等、持続可能性などを原則とする自治が行われている。

³² Islamic State of Iraq and Syria（イラクとシリアのイスラーム国）の略称。シリアにおいては、PYD（クルド民主統一党）がトルコ国境近くのコバニ（アイン・アル＝アラブ）で ISIS と地上戦を戦ってきた。

などのイスラーム主義組織がシリアで影響力を持つようになります。そして、これらの組織は、ダマスカス政権ではなく、北部のクルド人を攻撃するようになりました。2014 年に始まり、クルド人を国際社会に可視化した PYD-ISIS 戦争は、現在なお継続中です。

シリアのクルド人は独立国家を望んでいるわけではありません。トルコのクルド人と同じように、彼らが要求しているのは、平等な市民権と民主的自治です。1937 年、クルド人は、当時フランスの植民地だったシリアで反乱を起こし、同じことを要求しました。しかし、フランスが 1946 年にシリアを去ったのち権力を握ったアラブ政府は、反クルド政策を継続しました。1962 年、12 万人のクルド人が市民権を剥奪され、「流浪（ヘイマトロス³³）」の地位に置かれました³⁴。ダマスカス政権は、「あなたたちはシリア人ではありません。トルコ出身です。そこに行きなさい」と言って、彼らから市民権を剥奪したのです。

政権が言った言葉は、ある意味では事実でした。シリアのクルド人の一部は、1925 年にトルコの国境内で起こったシェイフ・サイードの反乱後、トルコを追放された人々だったからです。1923 年に建国されたトルコ共和国は、1924 年の第 2 憲法でクルド人の存在を否定し、シェイフ・サイードの反乱が起きました³⁵。シリアのクルド人のごく一部は、この反乱の鎮圧後に追放されたか亡命した人々でした。

クルディスタンは、イラン、イラク、シリア、トルコの 4 つの国によって分割されています。クルド人の村の中には、片側がシリア、もう片側がトルコになっているところもあれば、片側がイランに、もう片側がイラクに位置しているところもあります。例えば、私の所属する部族の半分はトルコの国境内にいますが、残り半分はイラクの国境内にいます。このような場合、クルドの人々は、あるときは文化的、あるときは経済的な関係から、つねに人工的な国境を「侵犯」することになります。例えば 2011 年トルコは、イラクの隣村に貿易に出かけた自国の市民 34 人を射殺し、軍用機で帰還させたのです！

本題に戻ります。

シリアのクルド人の一部は、1951 年に日本が朝鮮人にしたように³⁶、国籍を剥奪されました。現在のシリア大統領バシール・アル＝アサドの父、ハーフェズ・アル

³³ ドイツ語からの借用語。法的に故郷を持たず、どこの国の市民でもないとされる人々を指す。

³⁴ シリアに住むクルド人の約 20%にあたる。1962 年の国勢調査で、クルド人は、1945 年以前からシリアに居住していたことを証明するよう要求されたが、実際には 1945 年以前からの居住者も市民権を剥奪されることとなった。

³⁵ 1923 年のローザンヌ条約の結果、クルディスタンは分断され、1924 年の第二憲法では、公共の場や学校でのクルド語の使用およびクルド語での出版が禁止された。これに対し、クルド人は連続的に反乱を起こすが、そのはしりとなったのが、クルディスタンの独立を掲げた 1925 年のシェイフ・サイードの反乱だった。

³⁶ 日本政府は、1952 年のサンフランシスコ講和条約発効に際し、在日朝鮮人・台湾人を日本国籍非保持者と見做したため、日本国籍非保持者はいずれかの在留資格がない限り日本に在留できないとする、1951 年の出入国管理令の対象となった。

＝アサドは、「アラブ・ベルト」政策³⁷と呼ばれる政策を実施しました。シリアのクルド人村の隣にアラブ人の村を配置し、クルド人の村と村のあいだに境界を設けたのです。

2011 年のシリア内戦では、クルド人には二つの選択肢がありました。シリア北部のアラブ人に宣戦布告してダマスカス方面に攻撃を仕掛け、シリア内戦の中でさらなる民族間の内戦を行うか、あるいは、自分たちの地域にいるアラブ人や他の民族や信仰を異にする者たちと平和に暮らせる統治形態を編み出すかのどちらかです。

このような状況において、クルド人が指導者と認める PKK の創設者アブドゥッラー・オジャランが獄中で発展させたのが「民主的連邦主義」というテーゼでした。このテーゼによれば、イラン、イラク、シリア、トルコの間で分断されたクルド人がこれら 4 つの国家すべてと戦って戦争に勝利し、統一クルディスタン国家を樹立することは不可能であるばかりか、クルド人は、大虐殺の危険にさらされることになります。したがって唯一の平和的解決策は、国民国家が設定した国境を越えて、4 つの国家に分断されたクルド人が互いに経済的、文化的、社会的、政治的な関係を持つことができるような、民主的連邦制をつくることだとオジャランは著しています。それが実現した場合でも、イラン、イラク、シリア、トルコの 4 カ国が、国民国家の国境を放棄したり、国土が分割されたりする必要はありません。これは、EU のような仕組みを中東で実現することを意味します。ヨーロッパ諸国にはそれぞれ国境がありますが、人間の移動を妨げたり複雑にするような国境ではありません。例えば、フランス人がドイツ、イタリア、オーストリアに行く場合、パスポート・コントロールなしで簡単に移動できます。同じことが中東でできない理由などあるのでしょうか。

トルコのクルド人革命軍のリーダーであるオジャランは、シリアのクルド人や PYD にも直接的な影響を及ぼしています。オジャランは 1980 年に社会主義者やクルド人を標的としたトルコによる軍事クーデターの後、組織をシリアに移し、1979 年から 1998 年までシリアで生活していました。ですから、2013 年以降、シリアのクルド人は、オジャランのテーゼを踏まえて、ISIS と戦うと同時に、戦争という条件下であっても、シリア北部に相対的な民主的連邦制の構築を進めてきたのです。現在、シリアのクルド人は、新国家の樹立を目指さず、シリア国内の連邦制の中で暮らすことを求め、中東全域では民主的連邦制を要求しています。

もちろん、すべてのクルド人がこのテーゼに従っているわけではありません。オジャランを「クルド人らしくない」と批判し、クルド国家の樹立を目指さないことを厳しく批判するクルド人ナショナリストもいます。2003 年にアメリカがイラクに侵攻して以来、イラク北部のクルド人は連邦制をとってきました。しかし、同地のクルド政権は 2017 年 9 月 25 日に独立住民投票を実施し、98.88%のクルド人が独立に「賛成」票を投じました。けれども、イラクにおけるクルド人独立構想に対するトルコ、イラ

³⁷ 1962 年、シリア政府は、アラブ民族主義に基づき、アラブ・ベルト政策を開始したが、これは、シリアとトルコの国境地帯からクルド人を追放し、アラブ人に居住させるというものだった。

ン、イラク政府の反応は厳しく、その実現が阻まれています。

クルド人は以前にも独立国家を樹立しようとしたことがありましたが、そのような試みは虐殺をもたらすことが分かっていたため、実現に至るまでの措置はとれませんでした。しかしながら、クルド人が独立国家に向けて一步を踏み出さない理由は、大量虐殺への恐怖だけではありません。100年にわたり国民国家の形成によって最も苦しんできたクルド人は、だからこそ、民主連邦制を求め、その民主的で平等なシステムのもとで、異なる民族が共に生きられると信じているのです。

現在、クルド人が望んでいるのは、自分たちの存在とアイデンティティが憲法で認められ、母語で教育を受け、母語で政治・文化・商業活動を行えるようになることです。クルド人は、憲法に、クルド人とトルコ人の平等が明記されることを望んでいます。しかし、トルコで支配的な右派政治は、「憲法で民族のアイデンティティを強調する必要はない」と言います。しかし、クルド人にとっては、自分たちがすでに無視されているという状況があり、だから、クルド人の存在を憲法で強調すべきだと主張しています。加えて、トルコの憲法では、実際には民族のアイデンティティが強調されています。現行のトルコ憲法第66条には、「市民権の絆によってトルコ国家と結ばれている者は、すべてトルコ人である」と明記されています。クルド人は、この記述は人種差別であり、自分たちの存在を否定することを意味すると考えています。これは間違った認識でしょうか？

呉 今回の話はシリアでの話でしたけれど、イラクに目を向けると、凄まじい分断政策があったなか 2005 年に至りイラク新憲法でクルドの自治が認められます。しかし 2017 年にクルド人自治区で独立を問う投票が行われると、今度はイラクが軍事的に自治区を奪還したという歴史があります。そのような状況からすると、最後の方におっしゃっていた国家と虐殺という関係にも関わりますが、独立して国家を求めることそれ自体が危うさを帯びていて、そのため自治運動は生き延びていくための手段であるだけでなく、国家と虐殺に対抗するためのものでもあるかもしれません。そういった議論がクルドの人たちの間でどれほど共有されているのかなど、いろいろお聞きしたいことはあるのですが、ここで一旦区切らせていただきます。

＜難民＞から考える未来の homeland

～クルドと沖縄を結んで～

パネリスト：イルファン・アクタン / 仲里 効 / 新城 郁夫

作成：ワタン研究プロジェクト

著者：イルファン・アクタン、仲里効、新城郁夫、呉世宗、岡真理

編集：岡 真理

編集補助：筒井華子（京都大学大学院 ASAFAS）、兼定愛（慶應義塾大学 SFC）、佐藤有香（早稲田大学大学院文学研究科）

発行：2023 年 11 月 26 日

連絡先：プロジェクト・ワタン事務局

projectwatan3@gmail.com

© Irfan AKTAN, Isao NAKAZATO, Ikuo SHINJYO, Sejyon, O, 2023（各自発言部分）

©Mari OKA 2023